

2. アンケート集計結果（自由回答の主な意見）

(1) シンポジウム全体・進め方について

- 貴重な学習の機会だった。またこのようなシンポジウムを開催してほしい。継続により地元阿蘇住民にみならず、県内外の方々の草原再生への意識が高まるのではないかと。今後も数多く開催され、情報収集や議論の場を期待する。
- 次回は是非、会場の参加者や農業経営者、実際に野焼き、採草等をしている現場からの意見をもっとたくさん聞きたい。
- 長野さんの美しい写真の映写があつてよかった。改めて阿蘇の良さを実感し、癒やされた。
- シンポジウム会場を、あか牛のPRや試食・販売、ボランティア募集の窓口などに利用してもよかったのではないかと。
- 消費者は“草原のために”買い物はしないが、あか牛が本当にヘルシーで美味しいと知れば買う人も増える。草原を再生したいなら、もっと産業として受け入れられるPRが必要ではないかと。次回は是非消費者も入れてディスカッションしてほしい。

(2) テーマについて

- 今回は、草原再生に肯定的な話ばかりだったので、「畜産的な用途が終わったのだから森林に戻せ」とか、「野焼きは温暖化を進める」とか、「水源涵養には森林の方がいい」など否定的な意見に対しては皆で話し合いたい。
- 草原再生への取り組み活動を知り感銘を受けた。具体的に再生を進めて行くことが大切。

(3) パネルディスカッションについて

- 前半の講演だけで長い講演は充分。パネルディスカッションの一人一人の話が長すぎた。会場からの意見をもっと聞いて、ディスカッションしたかった。

(4) 阿蘇草原再生に向けた意見、アイデア

目標・基準を立てるための情報提供と意見集約

- 一般市民に問題を啓蒙する場を積極的に設ける必要がある。イベントや理解を深めるための常設の展示・国立阿蘇青年の家の研修メニュー化等も検討してみてもどうか？
- 草原の維持と言っても立場や思いの違いから、何を第一にするかという段階になるとかなり慎重でなくてはならないと実感した。
- どこまで、なんのために再生を図るのか、明確で具体的な目標・ビジョンと共通認識を打ち出すために議論する必要がある。地域やホームページなどで意見を集約してみてもどうか。

草原再生に関わる事柄の積極的なPRを

- 阿蘇の草原維持と阿蘇の畜産との結びつきをPRし、あか牛肉の流通を拡大したい。あか牛はどこで買えばいいのかが、全国から買えるようPRしてほしい。（インターネットが使えない人にも対応）

- あか牛肉がヘルシーであることと草原維持というイメージをPRして県内外の市場へと拡大してほしい。または、県民一人が1ヶ月で何グラムの阿蘇の牛肉を消費してくれれば、どのくらい草原維持に寄与できるというような具体的PRも必要。
- ボランティア活動参加のためのPRをして欲しい。研修情報などをわかりやすくし、熊日との協力による新聞広告の効果を狙ったり、学校山登りの会とともに参加者を増やしたり、テレビ、ラジオ等のメディアを活用し、九州全体、全国に広くPRしてほしい。
- 熊本城主募集（補修募金）のように「阿蘇草原地主」としての募金活動をし応じた人に「ワッペン」を公布するのはどうか？そしてワッペンが多くの人々の目に触れて「理解と協力」が拡がり一大県民運動になると思う。

草原再生と経済基盤の確保

- 阿蘇の草原を守り再生するには、阿蘇に住む人々がそこで生活できる経済的恩恵（収入）があること、地域の経済活動（畜産農業）との相互関係が基本。そのための政治的手助けと農産物の生産販売への支援、雇用のチャンスの拡大等の情報発信が必要。
- 草を刈ることが収入となり資源（肥料、エネルギー等）として活用されるサイクルを官民一体で創出していくことが重要。
- 畜産は生業であり、その結果が草原保全につながっている。ボランティアの前に、畜産が生業として成り立つ取り組み、農業後継者問題の解決等が根本になってくるだろう。

自然保護と破壊

- 人間が手を入れて管理する部分と自然に任せる部分の区分を明確にすべき。
- 景観の美しさを、観光という点からのみ重視すると、道路や施設の増設による自然破壊が進むのではないかと心配。また多くの地元の人達やボランティアの人々が環境保全に努力する一方、商業目的で環境を破壊しているものもある。なるべく自然のままの阿蘇を残してほしい。
- 県の新税（森林環境税）からの助成を利用し草原再生を。特に行政は畜産農家の拡大がメインになり過ぎているが、畜産拡大を中心にするのではなく、九州5県の河川に影響を与えているという大自然阿蘇の100年、200年の環境保全という視点から草原再生を考える必要がある。
- 草原再生によって自然環境が保全されることで、作物を荒らすサルなどが山に戻っていけばいいと思う。

野焼き・放牧

- 草原再生に最も重要な野焼きの作業を軽くするための取り組みの一つとして、草原の中にある植林地（スギ、ヒノキ等）を広葉樹に変えてほしい。それにより輪地切り等をしなくてすむところが沢山ある。各牧野組合が抱えている一番の悩みです。
- 高齢化し後継者不足にある中で放牧以外での草原の利活用を進めて行くべき。入会権を廃止し、1坪オーナー制度の様に都市住民を取り込んだ管理を行う等も必要ではないか。

観光利用

- 人々がもっと気軽に阿蘇に来られることがボランティア活動やあか牛の消費拡大にもつながる。熊本駅からのアクセスの利便性、R57号の4車線化やバイパス道路の実現、パークアンドライド（バスのみで阿蘇見学させること）整備なども必要。
- 風車の設置やミルクロード（県道229号）沿いの放牧管理に必要な柵やバリケードの設置、とくに風力発電の巨大なタワーには景観上、違和感がある。草原内の建造物をこれ以上増やさないでほしい。また、国立公園区域内に新しく立てられる看板の制限やデザインの統一化など早めに最低限のルール作りを考えてみられたらどうか。

- 中岳と草原をめぐるツアーや草原を見てまわるツアーや乗物など、有料で1日2回程度でも良いのでやってほしい。また、草泊まりでの一泊など、昔の習慣を掘り起こし草原再生につなげて行って欲しい。
- 阿蘇の自然を生かした観光開発に重点を置いたイベントや昔の行商道を観光に利用することなどを検討してほしい。
- 草原インストラクターの養成と、草原を歩くウォーキングの企画、バリアフリーマップの作成（スキーのリフトの活用など）、草原療法の試み（ストレス解消）カウンセラーの活用など。

募金・入域料の徴収を

- 観光資源、景観の有料化を望む。外部者が阿蘇に入る際入村料を取る、阿蘇くじゅう国立公園への入園料を取るなど。有料駐車場や有料トイレの設置も検討するべきだ。
- 阿蘇草原を守るために草原を訪れる観光客に募金をお願いしたらどうか。国立公園区域をはっきり示し、その中に入る人々に環境保全のための注意や協力を求め、啓蒙し、賛同してくれる方から募金を集めるなど。

地域主体の取り組み

- 地元の人自身が阿蘇をどう考えているのか、もっと考え、地域全体として活用していく必要がある。中村教授のいう「住んでいる人々が主体的に考え、行政を利用するというスタンス」が大事で、地域住民が牽引力になって取り組み、阿蘇から熊本、そして全国へと大きな輪になって行動を起こしていくことが大切だと思う。
- まず、地域の方々単位で取り組む姿勢が大事。大きく捉え広げすぎないことが大切。政策だけに力をいれず本当の未来に残す自然を考えてもらいたい。地域住民による再生を望む。
- 阿蘇に生を受け阿蘇に育ち、現在も農業に生きがいを感じながら過ごしている。畜産には取り組んでいないが、地域の共有牧野の組合員として、数年前より維持管理に組合員が減少する中で苦労してきたが、多くの人々から阿蘇の草原の再生に関して多大な協力を戴いていることに對し本当に感謝。私達地元の者達も頑張っていきたいと考えている。

人材の確保・育成

- 県民が1年に一回はボランティアに参加できるようにしたらどうか、例えば県の教育委員会を通して、中高大学生のボランティアを募集してみてもどうか。なにより若い人の力が必要。
- ボランティア活動に、1年を通して参加できるシステムを常設する。それはNPO組織が最適。または企業などに参加を求めてのボランティア募集など。
- 「草原再生に向けた取り組み」に取り組むパイオニアを育て支援すること。ボランティアも必要だが、草原を必要（利用）とする人の育成が必要。

学校との連携

- 九州内の小・中・高校の研修事業として牧野作業の支援ツアーなどを取り入れて若いうちから体験、実感をさせる。自然の大切さ、共存する事を体で覚えさせる。
- 広く学校教育の中に取り込んでいくべき。将来を担う子供達へ、素晴らしい自然、景観、労働、文化として継承していくための教育の一環として県内小中高校教育に体験学習（野焼き、輪地切り）の時間を環境教育を導入すべき。草原を守り維持していくのは自分達の生活の中にあるということを知ってもらう。故郷は厳しくも素晴らしいところだと知ってもらうことが大切。
- 活動に取り組んでいる人たちをリーダーとして各学校、社会活動の場へ積極的に派遣して周知に努める必要がある。

地域・都市・行政の連帯

- 地域の意向と訪れる人との意識の差をどのように調整するかも問題になってくる。何のために再生するのかを明確にし、地域のコンセンサスが必要。連携にどんな方法論があるかについての今後の議論を期待する。連携に取り組んでいる人の情報のネットワーク化（井さんの取り組み等が広がるように）の推進をしてほしい。
- 阿蘇を取り巻く地域が同じ考えで取り組んでいく必要性を感じるので、地域づくりとの具体的な結びつき、草地と関係地域住民が参加、意見できる仕組みを今後は協議・構築して欲しい。
- 行政・住民・県民の努力や協力体制が必要だと感じる。現状では、行政、生産者、それぞれの段階で問題意識をもっているが、同じベクトルを向いていないのではないかと、住民の意識の向上、行政の連携、横の連携をもっと進めた幅広い行動をとってほしい。
- 農水省と環境省は植林と草原再生など互いに相反する事業を実施している。互いに方向性を確認し合い協調しあった事業を望む。北外輪の採石作業などにも規制が必要なのでは。

水源地としての視点

- 阿蘇の草原再生と維持が、阿蘇内だけでの話題に留まっているように思える。熊本市内の水道水が阿蘇を源とした地下水にたよっているのであるから、熊本市の行政や市民にも阿蘇を守る義務があるのではないだろうか。また、河川を豊かにし、地下水涵養に果す役割を阿蘇の草原が大きく貢献していることも、もっと強調してほしい。
- 阿蘇には多くの河川の源流があり、下流域の環境の質を守るのにも阿蘇が大きな力になっていると思います。

(5) 今後の関わり方

- 野焼きボランティア、パークボランティア活動をしていきたい。募集があればできるだけ、私も手伝ってみようと思う。今後も関心を持ってセミナー等があれば県民の一人として参加したい。
- 私も野焼きボランティアとして7～8年前から参加し、自分の周りの地域の方々にもアピールして、阿蘇の現状を知って欲しいと願っている。
- 阿蘇からの報告者全員に共通の意識を感じた。それは阿蘇の景観、文化を維持、守るということではないのか。私も同じ問題意識があるので是非阿蘇の草原再生に携わることがあれば積極的に参加協力したいと思う。従って、今後も阿蘇に関する情報発信をどんどんしてほしい。
- 高齢なため、積極的にボランティアには参加できないがなにか行ないたい。例えば、これからはこの草原再生に対する思いを次世代につなげることも大切ではないかと思う。